

慶應義塾大学外国語教育研究センター

Newsletter

Vol. 7

Dec. 2005

講演会「ことばを学ぶ意味」

総合政策学部助教授 國枝 孝弘

2005年10月11日(火)日吉キャンパス第4校舎26番教室に於いて、外国語教育研究センター主催講演会「言葉を学ぶ意味」が開催された。講師は総合政策学部助教授であり、またNHKテレビ「フランス語会話」の講師としても活躍中の國枝孝弘先生。冒頭から気さくに語りかけ、会場からの声も取り入れながら進めていく魅力的なトークに、約90名の参加者は親しみを覚えつつ話に引き込まれていった。以下は、この日の講演をもとに講師が執筆したものである。

ことばを学ぶ意味はどこにあるのでしょうか？たとえば大学に入って外国語を学ぶ意味はどこにあるのでしょうか？私が勤務する湘南藤沢キャンパスでは、新入生は入学してから、自分が学びたい言語を選択します。そのために私たち教員はガイダンスをひらき、各言語の特色や魅力について話をします。その際あらためて、学生に「何語を履修したらいいでしょうか？」と尋ねられれば、まずは私の担当であるフランス語を離れて、「自分から最も遠い言語を選んではいかが？」と言うことにしています。大学とは、親から独立し始め、しなくてはならない「勉強」ではなく、自分の興味の対象は何なのか、たえず自分に問いかげながら、「学び」という営みを始める場所です。いわば自分の既知の世界を離れて、新しい、未知なるものに出会う場所です。その時外国語は、<外>のものであるゆえに、まさに私たちにとって未知なるものを発見させてくれる貴重な体験を与えてくれます。そして新しいものに触れる体験は、たとえ小さなものであっても、私たちに喜びをもたらしてくれるはず。その時日々の生活は少しだけであっても新鮮なものとして目の前にたち現れてくることでしょう。

それではなぜ外国語は未知なる世界へと私たちを誘える魅力を持っているのでしょうか？それはことばは、その存在を通して、そのことばを話す人々、そしてその人々の文化へと私たちを導いてくれるからです。ことばを学んでいると、

そのことばを話している地域への関心がだんだん高まっていきます。それが私たちになじみのない文化であればあるほど、私たちは不思議な気持ちにとらわれます。例えば私は、つい最近もフランス映画でチュニジア移民のユダヤ教徒の人々の生活・信仰について初めて深く知りました。これは日本語という母語の中にだけいては、なかなか出会うことの難しい世界だと思います。ことばを学ぶことは既知の世界を抜け出して、未知の世界と触れ合う体験なのですが、それによって私自身も少しだけ豊かな人間になります。

この意義を理解する時、外国語を学ぶということ、さらには学ぶという行為は、何も大学に限ったことではなく、私たちがこの先の人生を通して、ずっと続けていくものだということがおわかりいただけると思います。私たちが日々生きることは、昨日とは違う出来事を体験して、少しだけ世界を知り、かつ自分が変わることにあります。その体験を与えてくれる貴重な学びが外国語にはあるのではないのでしょうか？



CONTENTS

講演会「ことばを学ぶ意味」	國枝 孝弘	1
夏季外国語セミナー2005		
総括	森 泉	2
英語プレゼンテーションコース		
日向 清人		2
英語で環境学コース	Dale Haskell	3
英語ワークショップ		
ビジネスプレゼンテーション	Robert Tobin	4
ジャズ・チャント	吉田 友子	4
アカデミックプレゼンテーション	David Shea	5
研究プロジェクト活動報告		
政策提言プロジェクト	境 一三	6
自律学習・ICTプロジェクト		
倉館 健一		6
一貫教育校の活動報告	Patric Hardy	7
中等部の外国語教育	江波戸 慎	7
Announcements		8
編集後記		8

夏季外国語セミナー2005

総 括

外国語教育研究センター副所長 森 泉

当センター恒例の夏季外国語セミナーが、慶應義塾立科山荘において9月13日から16日まで3泊4日の日程で開催された。今年度は昨年の74名を上回る94名の参加があり、天候にも恵まれて活気のある合宿となった。英語プレゼンテーションコース、TOEFL対策コース、TOEIC対策コース、英語ドラマコース、英語で環境学Planet Earth(以上英語)と中国語コース、フランス語コースの計7コースが開講された。当初予定されていたドイツ語、ロシア語、スペイン語の各コースは残念ながら参加希望者が少なく開講できなかった。

金田一所長と副所長の私はコース全体のケアをするという役回りでの参加であったが、旧語学視聴覚教育研究室時代の合宿以来ほぼ10年ぶりに経験する立科でのセミナーは、今なお十分に魅力的であった。各コースとも、時間をほぼいっぱいに使った密度の高い授業が行われたが、さらにティータイムや食事の際にも教員を取り囲んで熱心に語り合う姿が印象的

であった。また、夜の自由時間に、即席のロシア語コースが開かれたり、ドイツ語の発音を矯正してもらったりと、コースを離れたプログラム以外の交流もあった。こういったところにこそ合宿の醍醐味があるのかもしれない。

良いことづくめのようなのであるが、反省点もある。セミナー終了後に行ったアンケートによれば、インフラに関する不満が多い。立科山荘の宿舎は一棟のみが立派に建て替えられたものの、残り二棟はあまりに老朽化している。入浴設備も十分とは言いがたい。おしなべて語学プログラムの評判が良いだけに、惜しいことである。このあたりは塾当局の理解と援助を期待したい。

夏季セミナー初参加で、その魅力にすっかりとりつかれた金田一所長は、英語ドラマコースにも飛び入りで参加され大奮闘であった。ある意味で教育の原点に立ち返る経験の出来た4日間であったかもしれない。

よくぞここまでやった！実践的なプレゼン講習

英語プレゼンテーションコース担当 日向 清人(非常勤講師)

Newsletterの読者の方々に、今年の夏、立科山荘で行われた夏季外国語セミナーでの英語プレゼンテーションコースの様子をご報告申し上げます。

今回の参加者は計10名。最年少は1年生、最年長はドクターの3年で、主力は3年生といった感じです。男女別では男子2名、女子8名。学部別では、文学部2名、法学部3名、理工学部が3名、そして商学部と経済学部が各1名という構成でした。

初日の午後はレベル分けを兼ねて英語で自己紹介をしてもらい、そのあと、大体のレベルにあわせて3チームを編成。次いで、プレゼンとはどういうもので、どう進め、かつ、どういった言い回しを使うかをざっと説明してから、チームごとのテ

マに即してのプレゼン作りにとりかかってもらいました。

テーマはAチームがスポーツ紙的なきわどいショットをも取りあげつつ、いやらしい視線とされるかは見る人次第、さらには文化の問題もあるという、ちょっと難しいテーマで、Bチームが「失敗しない結婚の条件」、Cチームは「新しいデートスポットとしてのアキバ」。これをもとに、最終日の夕食後に行われる発表会に向けて、パワーポイントでスライドを作りながら、「しゃべり」の原稿を作り、リハーサルを繰り返すという手順でした。この間、決まり文句をきちっと言えるよう矯正する発音クリニックやら「より効果的なデリバリー」といったミニ講義が入ります。

出来映えはと言うと、ゼロから始めて20時間弱で、よくぞここまでやったと言える、なかなかのものでした。下を向きながら話してしまうといった課題を残したものの、何よりも、本人たちが、その種の改善点にすぐ気づくぐらいで、プレゼン作りのスキルをきちんと身につけられたのが最大の成果です。また、話し手自身の視線、表情、体の動き、聴衆との関係作りを重視される吉田友子先生のアプローチは納得するものばかりで、真似せねばと思ったことでした。ただ、学生たちを引き込む、あの吉田先生のにこやかな表情というか、big Hawaiian smileとでも形容すべきものは、私の限界を超えています。



PLANET EARTH SUMMER SEMINAR

英語で環境学コース担当 Dale Haskell, Part-time Lecturer

The Planet Earth Summer Seminar was held at the Keio University Lodge in Tateshina, Nagano, from September 13th to 16th, 2005. Our class included seven students from Mita, Hiyoshi, and SFC campuses. The course involved students in a variety of classroom and fieldwork activities focussing on the natural environment surrounding the lodge. Tateshina is a highland area 1500 metres above sea level, with extensive forests, freshwater Lake Megami, and Mt. Tateshina towering 2530 metres above the valley.

Fieldwork activities included exploratory walks around the lodge area, the shoreline of Lake Megami, the summer farm which occupies the winter ski slopes, and the highland forest at the top of the gondola ski lift on Mt. Tateshina. Mapmaking and photography were focus activities during our fieldwork, identifying natural and artificial features in the lodge area, and the valley area between the lake and farm.

Changeable mountain weather was a major influence on the timing of our fieldwork, although we were sometimes victims of bad timing. On one memorable day, we were rained on during both morning and afternoon fieldwork, but whenever we returned to the classroom, the weather became fine and dry.

Classroom activities included discussion of our lifestyles and our effect on the local environment, exchanging information and opinions about environmental issues, and analysing the documentary movie *Koyaanisqatsi*, which dramatically contrasts natural and artificial landscapes. In preparation for our class presentation at the seminar party, we designed poster-sized maps of the local environment, and selected photos for PowerPoint presentation.

After extensive exploration, photography and mapping activities, we discovered that many environmental features which appeared to be natural were actually engineered or artificially created. Notable examples were:

* Lake Megami - Created in 1963, with a long straight

concrete bank holding back the water from the original streams and wetlands. It was an unpleasant surprise to discover that I was older than the lake. At the far end of the lake, the bleached grey trunks of a submerged forest were clearly visible, providing dramatic evidence of a radically changed environment.

* Tateshina stream - Another engineered feature, flowing from the lake along a concrete canal. Flowing through Keio Tateshina Lodge, the stream alternated between natural rocky curves and artificially straight sections, including concrete banks beside bridges.

* Forests and plantations - Although there were some areas of mixed native forest, there were

also large expanses of plantation forest, evident in the straight rows of trees, which were the same species, age and height. On the lower slopes of Mt. Tateshina, the forest had been completely destroyed to create ski slopes for winter tourists.

* Tateshina farm - Cows grazing on the grassy ski slopes gave the impression of a farm, although the cattle, pigs, goats, sheep and horses were temporary visitors for another tourist attraction. Every winter, the animals return to their real farms in the surrounding countryside, while skiers invade the deforested ski slopes.

* Pollution - We discovered oil floating in the swampy boardwalk area beside the lake, and an orange coloured, possibly toxic pit of garbage close to the Keio Lodge kitchen.

Our class presentation at the seminar farewell party revealed the artificially natural features of the local environment, using large poster maps and PowerPoint photo presentation. We made one of the most serious presentations during a lively evening, and our discoveries informed and surprised many people in the audience. Our small group had enjoyed an interesting and productive few days, exploring the natural, and not so natural, environment of Tateshina.

Reference: Godfrey Reggio (producer & director), 1983, *Koyaanisqatsi*, Santa Fe, Institute for Regional Education



Workshops

今秋開催された英語ワークショップのレポートをお届けします。プレゼンテーションに関する2本のワークショップは、学生が個々の目的に応じて選択できるよう、あえてビジネスとアカデミックという2つの領域にテーマを分けて開催したのですが、むしろ両者の違いを再認識することに興味が引かれたのか、2つとも参加する学生が10名以上いました。ジャズ・チャンツの参加者からは、英会話を学ぶ機会の不足を訴える声とともに、ジャズ・チャンツを他の言語の学習にも活用できないかという発展的な意見も寄せられました。ワークショップの実施概要については、Newsletter Vol.6 p.8をご参照下さい。

ビジネスプレゼンテーション・ワークショップ (Effective Business Presentations in English)

Robert Tobin, Professor, Faculty of Business and Commerce

To make an effective business presentation, you only need four elements:

1. **Hook**-to get the audience interested;
2. **Too**-some ideas or important information that you want everyone to walk away with;
3. **Book**-some reference materials; and finally a
4. **Look**-you've got to look credible enough so that people will trust you and your product.

The presentation on October 20, 2005 amplified each of these points and gave all of the participants plenty of time to practice their oral and nonverbal communication skills, including a way of describing an umeboshi's unique taste using only facial expressions.

Each participant received a list of Do's and Don'ts which included the following that have applications not only for business but for classroom learning as well.

DO

1. Know The Purpose-know why you're there.
2. Involve The Audience-ask questions-give the audience something to do.
3. Use Photos not Clip-art.
4. Have a Handout Different than the Presentation slides.
5. Make Eye Contact. Look at the audience
6. Put No more than 25 words per slide.
7. Demonstrate when you can.
8. Use Gestures that fit what you say.
9. Throw Your nervousness away.

DON'T

1. Read from The Paper or Look Down.
2. Apologize about Your Language Skill.
3. Look at the Screen or the Computer.
4. Use Too Many Fancy Sounds or Transitions.
5. Be too hard on yourself when it is over.

ジャズ・チャンツ・ワークショップ (The Creative Classroom) Workshop Facilitator: Carolyn Graham

商学部助教授 吉田 友子

I'D LIKE A SANDWICH

I'd like a **sandwich**

I'd like a **sandwich**

I'd like a **tuna salad sandwich**

I'd like a **tuna salad sandwich**

on **whole wheat toast**

and a **large bowl** of **chicken soup**

--Carolyn Graham (1986). *Small Talk*. Oxford University Press--



夕暮れの教室から軽快なジャズのフォービートが流れてくる。中では約20人の学生と数名の教員が、手拍子を取り、足でリズムをきざみ、ジャズのスイングに身をゆだねている。しかし、口ずさむ言葉をよく聞いてみると、それはジャズの歌詞ではなく、英語での簡単なあいさつ表現や日常生活でよく使われるフレーズである。

去る11月17日、ジャズ・チャンツの考案者であるキャロリン・グレイハム氏にニューヨークからお越しいただき、5限と6限に2回のワークショップを開いた。昼間は英語の教師、夜はジャズの演奏家であるグレイハム氏がある日発見したのは、アメリカ口語英語がフォービートだということだ。例えば上記にあるチャントの強調されている部分がビートの頭の部分である。このようにチャントとして英語を学ぶことによって、より自然なイントネーションが身につく、同時によく使うフレーズや文法のルールなども楽しく学ぶことができる。当日は英会話初心者の学生から、いずれ英語を教えることを目指している学生、さらに教員までが一緒に声を出し、グレイハム氏の生演奏を聞き、創造的な英語教育の形を体験した。

アカデミックプレゼンテーション・ワークショップ

(Academic Presentations in English)

David Shea, Associate Professor, Faculty of Business and Commerce

Giving an academic presentation inevitably involves standing in front of an audience and addressing people with poise, strength and clarity. There are also related strategic issues about how to deal with such matters as time constraints and questions/comments, all of which are particularly confusing for novice presenters speaking in a second language. However, in my recent presentation for the Research Center for Foreign Language Education, I tried to stress that an academic presentation most critically involves the analytic quality of discourse.

In my experience teaching academic writing and presentation, I have found that students often struggle with how to make a persuasive yet empirically based argument. In the workshop, I addressed the issue of developing an argument by introducing the term heteroglossia - or multivocality, the incorporation of the words and voices of an academic discourse community (Lave & Wenger, 1991). I tried to point out that academic talk is not simply a matter of asserting one's opinion, or even reporting one's findings with complex vocabulary and formal grammatical structure. Rather, academic argument (whether written or oral) involves a fundamental orientation to an academic audience.

In practical terms, heteroglossia suggests that a conversation is already going on, and that the first job of novice presenters (i.e., students) is to recognize what issues are debatable and what knowledge is taken for granted. The only way to find the right tone to address an audience is to listen before speaking - that is, to read. Any academic presentation is based on reading, and it is the writers of what students read who form the academic audience that students address.



Second, the concept of heteroglossia points to the fundamental characteristic of academic discourse: reference and citation. Academic argument is always grounded in other research. In a written work, references are embedded in the text accompanied by full citation of original sources. In an oral presentation, reference to other ideas and research is conventionally accomplished by use of signal phrases, such as *according to* and *as the author points out*, which allow the speaker to both incorporate other voices and to distinguish personal knowledge and opinion, thus avoiding the serious problem of plagiarism.

Following heteroglossia, I spoke about building an argument with assertion, explanation, and illustration - what I call the "analytic three step" where any claim is followed by elaboration and evidence. Often, inexperienced students frame ideas and opinions as unsubstantiated assertions, without support or clarification. To frame an argument to a knowledgeable community of scholars, however, requires sustained explication and substantiated elaboration of ideas.

I also introduced the strategy of making a concession, which allows a writer/speaker to incorporate disagreement into one's own argument. I pointed out that it sounds naive to talk about a topic, particularly a controversial topic, simply in terms of asserting one's opinion. Recognizing disagreement allows a speaker to demonstrate familiarity with ongoing discussion within the academic community on the one hand, and to present a more nuanced counter argument, on the other.

In conclusion, I reviewed a number of stylistic features that students seem to have trouble with, such as personal frames of reference, rhetorical questions, and prescriptive phrasing, all of which work to undermine an academic argument. I closed by encouraging students to think about academic presentations as not simply a matter of particular vocabulary or sentence structure, but rather ongoing dialog with the discourse communities in which they increasingly participate.

Reference : Lave, J. & Wenger, E. (1991) *Situated Learning. Legitimate peripheral participation*, Cambridge : University of Cambridge Press.

政策提言プロジェクト：CEFRの研究

外国語教育研究センター副所長・経済学部教授 境 一三

政策提言プロジェクトでは、センターのあらゆる活動の基礎作業として、大学各学部と一貫教育校の外国語教育の実態を把握するために、委員がそれぞれの所属部署について報告を行ってきました。それが一巡した現在、活動は次の段階に進もうとしています。

今まで明らかとなった実態を踏まえて、慶應義塾のあるべき外国語教育を模索する上で、優れた先行例を研究することは必要不可欠です。私たちはその事例として、ヨーロッパの言語教育政策を選択しました。それは、ヨーロッパ社会がずっと日本の現在・未来を先取りした多言語・他文化社会となっており、自らの文化と言語を大切にしながら、いかに(身近にある)異文化・異言語と接し、融和的・協調的社會を作っていくか、またそのために次代を担う子どもたちの言語能力をいかに養うかが真剣に議論されてきたからです。

議論は30数年も前の Threshold Level (それ自体が長年の議論を経たものでした)の策定時にさかのぼり、ようやく2000年に欧州評議会の Common European Framework of Reference for Languages (CEFR)「外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ共通参照枠」として結実しました。ここにはヨーロッパの言語教育政策の基本が盛り込まれています。具体的にいうならば、欧州評議会の加盟国ではすべての生徒に母語プラス二つの言語を学ばせる、言語能力の基準を統一的に6段階とし、教材作りや能力試験はこのレベル分けを基準にして行う、学習者の学習に対する意識を高めるために、生徒自身が自分で能力評価を行なうと同時に言語的成長の記録を残す、などが盛り込まれています。

複言語主義、Can-do List、Portfolio、Language Passport、Dossierといった新しい概念は、日本の外国語教育を考える時、私たちの言語観や教育観の根本的な見直しを迫るものだと思います。それだけに、このCEFRの研究は、骨のあるしかしやりがいもあるものになると考えています。

自律学習・ICTプロジェクト：はじまります。日吉キャンパスのテレビ会議授業

外国語教育研究センター助手・自律学習・ICTプロジェクトメンバー 倉館 健一

外国語教育研究センターでは、外国語授業に利用していただける中規模テレビ会議システムを導入しました。

日吉キャンパスでテレビ会議を行うためには、以下の機材が必要となります。

関心のある方は、外国語教育研究センター 倉館 (kr@hc.cc.keio.ac.jp)までご連絡ください。

使用機材： - 中規模テレビ会議システム用

POLYCOM VSX 7000e (ITU H.323およびH.320準拠)

個人テレビ会議システム用ソフトウェア

Nice to meet you

- 録画機材

- ノートパソコン、Webカメラ

機材の貸し出しや設置などは、できる限りサポートいたします。

教室環境：情報コンセントのある教室であれば、どこでも実施可能です。

IPアドレス：有線ケーブル接続の固定のグローバルIPが必要になります。

日吉ITCで申請を行ってください。

関連URL：<http://web.hc.cc.keio.ac.jp/~kr/vc/>



POLYCOM VSX 7000e



Keio Shonan Fujisawa Junior Senior High School Parliamentary Debate Workshop Report

Patrick Hardy, Part-time Lecturer, Keio Shonan Fujisawa Junior Senior High School

Parliamentary Debating and SFC

Fifth year students at SFC have been learning Parliamentary Debating as part of the curriculum for over 10 years. Parliamentary Debate involves real-time exchange of ideas and opinions, and is less concerned with research or amassing facts and figures. The aim is to provide students with meaningful communication opportunities and to increase their critical thinking skills.

When and Where

Saturday, October 8, 2005 at Keio SFC Campus, Auditorium

Participants

All of our fifth year students attended the workshop. It was organized by the English department at SFC. The workshop leaders were 4 debating champions from Oxford, Cambridge, and Nottingham Universities in England, along with a workshop leader.

Event

The first part of the event was a lecture on Parliamentary Debate techniques. The lecture involved the English debaters giving tips on debating techniques. These included the importance of emotional appeals, how to define debate motions, and when to ask questions. Following the lecture was a model debate that included two of our own returnee students. A floor debate followed, during which audience members were asked to contribute any comments or questions. Most of the contributions came from our



returnee students, who asked various questions and made comments to both sides in the debate.

Evaluation

Although much of the English was either very difficult or spoken too quickly for many of the students to understand, a lot of student feedback has been positive. Many students noted how it was interesting to see an exciting interchange of opinions in English, and that this has increased their desire to learn more about Parliamentary Debating. In the future, we would like to make sure that any seminar or workshop is more interactive, and includes more visual aids or activities that the students can take part in or understand.

一貫教育校の外国語教育(6)

中等部の外国語教育

中等部教諭 江波戸 慎

中等部では、今年度から火曜の午後2時間、2・3年生対象に選択授業が導入され、最大週7時間英語の授業を受けることが可能になり、願ってもない環境が整いました。また今年度より7人の外国人スタッフを迎え、中等部生全員が、週2時間外国人講師の授業を(分割1・Team Teaching 1) さらに選択授業で英会話を選択すれば、週4時間受けることが可能になりました。

さらに2・3年生においては、週1時間生徒の希望に基づく習熟度別分割授業を取り入れています。さらに選択授業では、基礎英語の他に、Intermediateと海外生活の経験がある生徒が多く受講するAdvancedとの2つのレベルの英会話講座が、いずれも1クラス10名前後の編成で用意できました。

日常の英語学習の成果を点検するために、ウェブ上で受験するCASEC(コミュニケーション能力判定テスト)を利用し、2、3年次で合計4回英語力を測定します。導入3年目になりますが、英検やTOEICとの相関も強く、英語の学力を向上させる動機付けにもなっています。

中等部の語学教育とつながる取り組みに、今年で10年目になる国際交流プログラムがあります。夏休みには、英国にて現地の子供たちと寝食を共にし、アクティビティを体験します。春休みには英国ホカリル校でホームステイを兼ね、授業に参加します。今年はベルギーからの訪問生徒に日本語を教える体験や、テレビ会議を通じ、ルーマニアの生徒と文化交流をする体験もできました。逆に10月には、ホカリル校生徒が中等部を訪問しますが、3年目の今年は17名が来校し、大変賑やかでした。その他、外国人の劇団による生徒参加型の英語劇等、授業以外でも英語に触れる様々な機会を与えています。

現在中等部ではISO14001の認証取得を目指し、学校全体が学習環境を見直しています。生徒が自ら英語を楽しく学ぶことができ、国際的な視野を広げ、英語が使える実感を持たせることを私たちは大切にしています。



ドイツ映画月間【ドイツ・トーキー映画の70年】

11月7日から12月5日までの約1ヶ月にわたり、当センター主催によるドイツ映画の連続上映会が開催された。折しも、本年4月から来年3月までは「日本におけるドイツ年」ということで、国内各地で様々なドイツ関係のイベントが開催されている時期でもあり、こうした機会にぜひ塾内でもドイツの歴史や文化に親しんでもらおうという企画であった。

上映された作品は、ドイツ映画史を語る上でははずすことのできない選りすぐりの10本である。しかし、それはいわゆる「名作」といわれてきたもの、映画賞受賞作といったような作品だけを意味するのではない。ハリウッド映画とは一味も二味も違ったB級ラブコメディがあるかと思えば、歴史上の奇人変人狂人を描いた一大スペクタクル映画もある。はたまた、第二次世界大戦およびその後の冷戦期における東西分裂を踏まえたシリアスな歴史ドラマもある、といった具合である。ややもすれば「暗い」「硬い」といったイメージをもたれがちなドイツ映画が、実は文学的、芸術的、および娯乐的にきわめて深い懐をもつことを、すこしでも多くの学生に知ってもらえたらと願ったためである。その結果、延べ270名の参加者(うち5名は全回参加)があり、上映前につけた10分程度の解説も好評で、企画の継続を希望する声が多数寄せられた。

最後に、作品解説等でご尽力いただいたドイツ語の先生方をはじめ、上映に先立ち広報にご協力いただいた多くの関係諸氏にこの場を借りてお礼を申し上げたい。ありがとうございました。

上映作品

「グッバイ、レーニン!」「逢いたくてヴェニス」「トンネル」「まわり道」「Uボート」
「ブリキの太鼓」「ビヨンド・サイレンス」「マリア・ブラウンの結婚」「フィッツカラルド」「嘆きの天使」

2005年度 海外研修(オーストラリア・米国)実施決定

2005年度末の春休み、外国語教育研究センター主催の海外研修が実施されることとなった。初年度のニュー・サウス・ウェールズ大学(UNSW)に募集枠を超える参加申込みがあったため、2回目となる今年度は、カリフォルニア大学サンタクルーズ校(UCSC)を新規の研修先として追加することを決定した。

UNSW、UCSCともに留学生向けの充実した語学集中プログラムを持ち、それぞれが国際社会から高い評価を受けている。プログラム上の両者の大きな違いは、UNSWでは、高い能力を持つ学生にはビジネス英語や進学準備英語のコースが履修できるチャンスがあるということ。一方、UCSCでは、受講生の興味関心に応じて選べる選択授業の幅が広く、また、正規課程の授業が一部聴講できるという点に魅力がある。

初年度からの変更点としては、一定の条件を満たせば、両プログラムの参加者が全学部において翌年度の春学期に2単位を認定されることになったこと。また、SFCの各事務室の協力を得て、藤沢地区3学部の塾生が地区内で申し込めるようになったことである(この結果、藤沢からの応募者が昨年1名から10名に増加)。

なお、両プログラムとも当初は定員20名ずつの募集であったが、定員を大幅に超える104名の応募(UNSW 38名、UCSC 66名)があったため、急遽両大学に受入人数の増員を依頼し、来年2月にはUNSWに25名、UCSCに30名をそれぞれ派遣することが可能になった。

実施概要

研修先大学	オーストラリア、ニューサウス・ウェールズ大学	米国、カリフォルニア大学・サンタクルーズ校
研修日程	2006年2月5日(日)~3月12日(日)〔5週間〕	2006年2月12日(日)~3月19日(日)〔5週間〕
参加費用	約50万円	約55~57万円
宿泊形態	ホームステイ	ホームステイまたは大学学生寮

編集後記

今回ご報告した3つの英語ワークショップは、従来の講演会とは違う学生参加型のイベントを、という吉田副所長の提案に基づき、センター初の試みとして開催されたものです。プレゼンテーションに関する2つのワークショップは、準備から効果的な発表テクニック、さらには発表者の心構えにいたるまで、即実践に役立つ内容であったため、学生は具体的な目的をもって参加し、それに見合う手応えと満足感を得ていたようです。

一方、ジャズ・チャンツの方は、「予備知識はないが、なんとなく楽しそうだから」という参加動機が多数見受けられました。「なんとなく」という言葉の周囲に漂う曖昧さは、モチベーションの低さを表わしているのでしょうか? そうではないと思います。「なんとなく」としか言いようのない気持ち、その小さな関心の芽を摘んでしまわずに、参加という一歩を踏み出した学生は、あの瞬間に未知なる世界への扉を開けたことでしょう。國枝先生のおっしゃる「ことばを学ぶ意味」を、このようなどころから実感した次第です。

外国語教育研究センター「Newsletter」編集担当 山口 昌子

Newsletter

Dec. 2005. Vol. 7

慶應義塾大学外国語教育研究センター
KEIO RESEARCH CENTER FOR
FOREIGN LANGUAGE EDUCATION

発行日 2005年12月15日

代表者 金田一 真澄
〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1
TEL 045-563-1111(代表)
E-mail fcenter@info.keio.ac.jp
http://www.fcenter.keio.ac.jp/